

吉田遺跡

-国営総合農地防災事業・吉田池改修工事に伴う発掘調査報告-



2002

天理市教育委員会

例　　言

1. 本書は、天理市教育委員会が国営総合農地防災事業（吉田池改修）に伴って平成13年度に実施した吉田遺跡における埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査は、天理市教育委員会生涯学習課文化財係が実施し、技術吏員青木勘時が現地における調査を担当した。
3. 本書収録の調査成果は、平成13年度に天理市教育委員会が実施した第2次調査の内容を主としたものであり、前年度（平成12年度）の奈良県立橿原考古学研究所による第1次調査については別途報告が刊行される予定である。なお、本文中の第1次調査の概要については調査を担当された奈良県立橿原考古学研究所小池香津江氏のご教示を得た。
4. 調査地および調査期間は以下の通りである。

吉田遺跡第2次調査　調査地：天理市吉田町地内

調査期間：平成13年11月15日～12月26日

5. 現地調査から遺物整理作業および本書作成に至るまで下記の方々の御助力を得た。記して謝意を表する。
江角啓（大阪市立大学大学院生）、元木和歌子（天理大学卒業生）、古田陽（天理大学学生）、
芳村信芳、中森富美代、藤岡早希
6. 現地調査および出土遺物について、下記の方々から有益な御教示、御指導を賜った。記して厚くお礼申し上げる次第である（敬称略・順不同）。
山内紀嗣・高野政昭・太田三喜・日野宏（天理参考館）、池田保信（埋蔵文化財天理教調査団）、
小池香津江（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）、石田成年（柏原市教育委員会）
7. 本報告の執筆および編集は青木勘時がおこなった。

目　　次

| | |
|-------------------|----|
| 第Ⅰ章　はじめに..... | 2 |
| 第1節　遺跡の立地環境..... | 2 |
| 第2節　周辺の遺跡..... | 2 |
| 第Ⅱ章　調査の契機と経過..... | 2 |
| 第1節　第1次調査の概要..... | 2 |
| 第2節　調査の契機..... | 4 |
| 第3節　調査の経過..... | 4 |
| 第Ⅲ章　調査の成果..... | 6 |
| 第1節　東調査区..... | 6 |
| 第2節　北調査区..... | 7 |
| 1. 層序..... | 7 |
| 2. 検出遺構..... | 10 |
| 第3節　出土遺物..... | 11 |
| 1. 土器類..... | 11 |
| 2. 石器類..... | 16 |
| 3. その他の遺物..... | 16 |
| 第Ⅳ章　まとめ..... | 22 |

第Ⅰ章 はじめに

第1節 遺跡の立地環境

天理市吉田町に所在する吉田遺跡（奈良県遺跡地図11-A-55）は、布留川南流と大和川との合流点右岸に位置し、奈良盆地東部でも盆地中央寄りの標高48m前後の低地部付近に立地する弥生～古墳時代の遺物散布地として知られている。奈良県遺跡地図によれば、その範囲は吉田池北西隅を中心に南北200m、東西100mの拡張で考えられているが、具体的な遺跡の内容については未調査であったため不明と言わざるを得ない。

第2節 周辺の遺跡

当遺跡の近辺には、吉田池の北西に接して周囲が耕作により削平されて後円部の一部のみが残るヒジリ古墳が所在し、周囲に残存する地割から馬蹄形周濠をもつ前方後円墳と考えられている。また、周辺で採集された埴輪片から6世紀代築造の後期古墳であることも知られている。他にも周辺では吉田町の村落西辺に吉田西垣内遺跡、ヒジリ古墳の北西方に吉田庄ノカイト遺跡等の遺物散布地が所在するが詳細は不明である。吉田池の調査では中近世の遺物と僅かな古墳時代遺物を除けば弥生時代遺物の出土が顕著であったため、ここでは周辺の弥生遺跡を主として紹介しておきたい。

吉田遺跡の周囲1.0km以内の範囲では、南に弥生後期末～古墳前期の方形周溝墓の検出された法貴寺北遺跡、西に弥生中期後半～末の多量の絵画土器や銅鐸形土製品、方形周溝墓で知られる清水風遺跡、南西には拠点的な大集落の唐古・鍵遺跡が位置している。当遺跡の北辺には古墳前期集落の合場遺跡が合場町村落の周囲に展開するが、北西方の嘉穂遺跡までに弥生集落遺跡の所在はあまり知られておらず、北方1.5km先で奈良盆地東部の拠点集落となる平等坊・岩室遺跡の所在が知られるのみである。従って、当遺跡の東方近辺では現在の布留川北流と布留川南流の間の低地部における弥生遺跡の存在は現状では認められず、南東側の大和川流域の東辺に点在する西長柄遺跡や近年の調査で弥生前期集落が確認された海知遺跡、前期古土器出土で知られる東井上遺跡等の分布域までの空白を認めざるを得ない状況である。

第Ⅱ章 調査の契機と経過

第1節 第1次調査の概要

平成13年2月13日から3月9日にかけて実施した吉田遺跡第1次調査では、吉田池西辺の堤基礎部分に幅4m、南北長69mのトレーニングを設定した。

調査区内の層序は北、中央、南の3地区で大きく異なっている。北区では、ベース面が黄褐色微砂混シルトの安定した土壤で、その上面に豊富な遺物を含む包含層が上下2層に堆積している。遺構面は下層包含層の上下で2面確認した。中央区では灰色砂層が堆積し、河川堆積層と思われる。包含層および中世以前の遺構は確認できなかった。南区では遺物包含層を確認したが、ベース面は黄灰色砂でやや不安定な土壤となっている。以上の土層観察から調査地北区は布留川・大和川北岸の自然堤防にあたり、南の河道へ向かって傾斜していく地形であったことが窺える。

検出した遺構は溝、土坑などで、弥生時代前期から古墳時代までの各時期にわたる。ほかに、中世以降の素掘り小溝群を全面で確認している。

弥生前期の遺構は北区下層遺構面で確認し、溝SD05の他、小溝、ピットなどがある。このうちSD05は



図1 吉田遺跡と周辺の弥生遺跡 (S=1/25000)

西でやや北に振る東西方向の溝で、幅約1.2m、断面形状は逆台形を呈する。この溝よりも北側のみに小溝やピットがあり、中央区砂層との境界近くに位置することから、居住域を区画する溝と考えられる。遺構内および下層包含層からは弥生前期後半の土器や石包丁、サスカイト片などの多くの遺物が出土している。

弥生中期の遺構には、北区で検出した溝SD02がある。幅約2.4m、深さ0.9mで断面形状はY字形を呈し、ほぼ東西方向をとる。埋土中からは弥生中期後半（第Ⅲ様式～第Ⅳ様式）の遺物が出土した。この溝も前期の溝SD05と同様、居住域を区画する溝である可能性が高い。

古墳時代の遺構には、北区上層遺構面の溝SD01、土坑SK08、南区の大溝がある。溝SD01は調査区北端に位置し、幅2.5m、深さ約20cm程の浅い皿状である。埋土中から古墳後期の埴輪、須恵器や土師器などが出土した。位置的にはヒジリ古墳の前方部にほぼ平行し、何らかの関連があると思われる。土坑SK08は溝SD02北肩に位置する土坑で、古墳前期（庄内式）の土器片が出土した。大溝SD04は幅8m以上で北東から南西に斜行している。深さ1.3m以上あるが、最下層は完掘していない。埋土の上・中層には古墳時代の遺物が含まれ、特に中層の北肩に近い個所では須恵器大甕がつぶれた状態で出土した。下層の

粘土からは時期を示す遺物は出土していないが、方形の木材が1点出土した。最下層には多くの自然木が含まれ、弥生土器の細片が数点出土した。調査面積が狭いため、この溝が人為的に掘削されたものかは不明である。

以上の成果から、吉田遺跡が弥生前期から古墳後期に至る複合遺跡であることが明らかとなった。遺構が集中する範囲はさらに吉田池の北でヒジリ古墳周辺の微高地に広がるものと推定される。

第2節 調査の契機

今回の調査は、国営総合農地防災吉田池改修工事に伴う事前調査として実施したものであり。前年度の吉田池西岸部分の調査（第1次調査・奈良県立橿原考古学研究所調査）に引き続き今年度は天理市教育委員会が北岸および東岸における調査をおこなった。従って今回の調査は吉田遺跡における第2次調査となる。

第3節 調査の経過

吉田池の調査では、今年度の池堤改修工事にかかる北岸および東岸に平行する位置にそれぞれ幅4mを基調とする調査トレーンチを設定して進めることにした。当初は調



図2 調査地点位置図 (S=1/5000)



写真1 調査前全景（北西から）

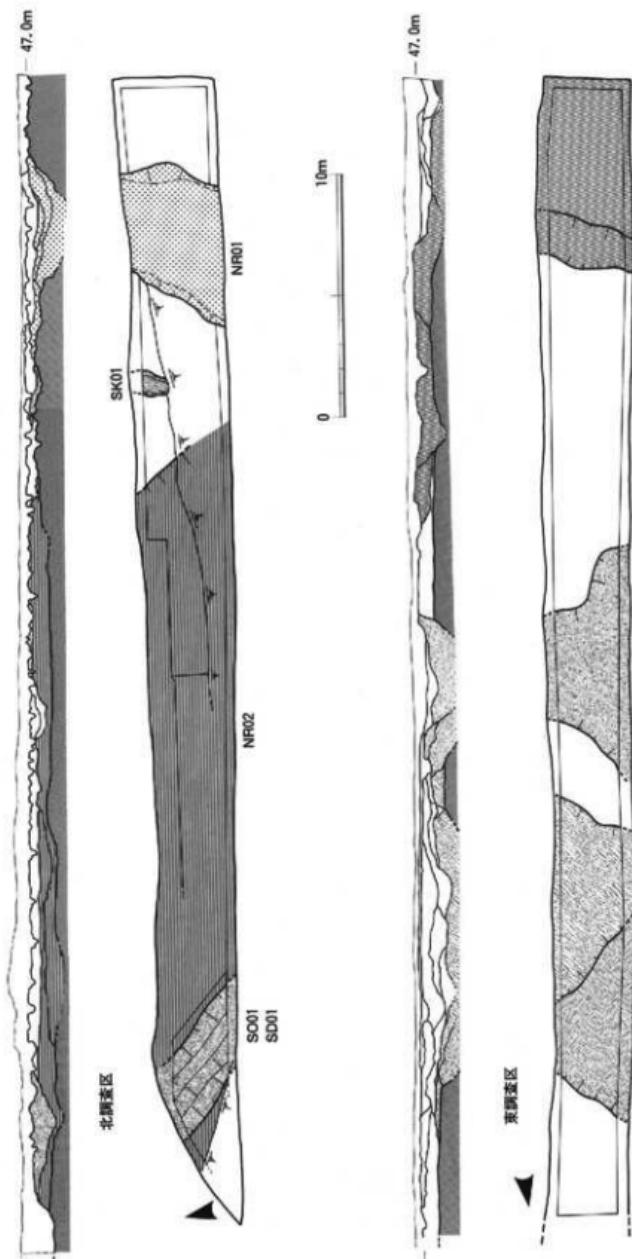


図3 各調査区 平面・土層図 (S=1/200)

査区ごとに調査を終える予定であったが、掘削と排土にかかる作業員と重機利用の作業効率から両調査区とも同時に進める結果となった。なお、吉田池北岸の調査区を北調査区、東岸の調査区を東調査区とそれぞれ呼ぶことにして調査を実施した。現地における調査は、平成13年11月15日より開始し、12月26日までの期間で実施した。実働25日、作業員延べ179人を要した。総調査面積は400m²であった。

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 東調査区

吉田池の東岸に設定した幅4m、長さ53mの南北に長い調査区である。現状の池堤に近接してトレーナーの掘削をおこなったが、池岸埋土以下では北トレーナー同様にため池開削以前の南北方向の素掘り小溝群が検出された。しかし、それ以下の堆積層序によると調査区全体に自然河道の重複した堆積状況が認められ、調査区北端付近に明瞭な川岸肩部を見つけたほかに川底底面となる凹凸の著しい状況が確認された。調査区の中央では流木の埋没と弥生前・中期の土器を作う砂・シルトを基調とした堆積層の落ち込みが見られ、南側では同様に弥生前期の土器のみを作う粗砂・砂疊層の落ち込みをそれぞれ検出している。なお、調査区東壁の上層断面観察から、これらの自然河道は北西～南東方向の3～4条の重複し



写真2 東調査区 全景（北から）



写真3 東調査区 自然河道群
(北西から)

た自然河道群として考えられよう。

第2節 北調査区

吉田池の北岸に設定した幅4m、長さ約48mの東西方向に長い調査区である。本調査区の西端では改修工事の都合から池堤から南西方向に設定された重機、機材等の搬入のための作業路が調査着手以前に設営されており、若干の調査箇所縮小といった制約を受ける結果となった。

1. 番序

池岸埋土から吉田池開削以前の旧耕作面直上（標高47m前後）までの上部堆積層（第Ⅰ・Ⅱ層）より下位では、調査区西半にのみ層厚約0.4m前で弥生前・中期の遺物包含層（第Ⅲ・Ⅳ層）の遺存を確認することができた。また、これらの遺物包含層直下ではいずれも自然河道の堆積が続き調査区全体では安定した明瞭な地山面は検出されなかった。なお、トレンチ西端の遺物包含層上面では南東～北西方向の溝SD01を検出し、埋土からは弥生前期～中期末の土器が出土している。調査区東半では前記の上部堆積層以下でほとんど無遺物の砂層堆積（第Ⅴ層）のみが続き、この砂層上部で弥生中期前半の土器の出土が



写真4 北調査区 全景
(上空から・上が北)

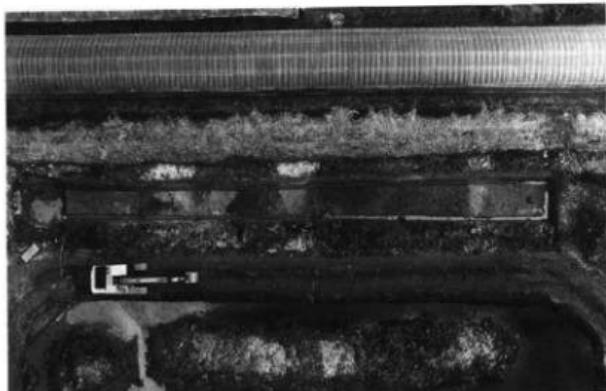
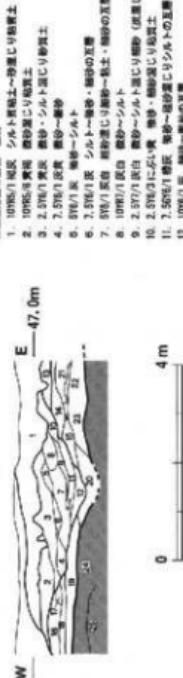


写真5 東調査区 全景
(上空から・上が東)

西側

上部土壌層の土性・土質

図4 北調査区 土壌図 ($S=1/100$)

中央

中段

東端

8

下段

北調査区 土性・土質

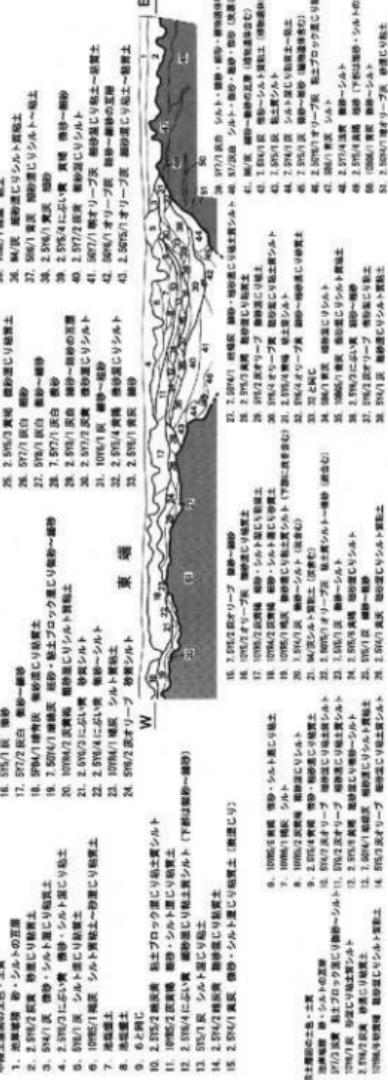




写真6 北調査区 全景（西から）



写真7 北調査区 溝SD01（南から）



写真8 北調査区 自然河道NR02東半
(南西から)

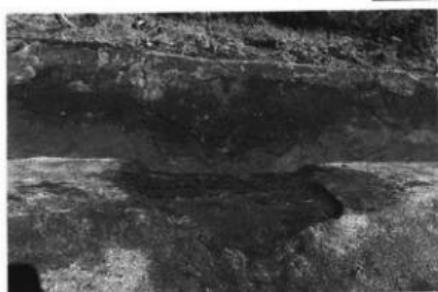


写真9 北調査区 土坑SK01（南から）



写真10 北調査区 自然河道NR01（南西から）

見られる残りが浅い土坑SK01を検出した。

トレンチ全体としては、調査区北壁の土層観察よりトレンチ西半より西側に傾斜する弥生前期～中期初頭の土器を含む砂、粘土による堆積層（第V～VI層）を確認したことで大半が自然河道NR02となることがわかった。また、調査区東端でも弥生前期の土器を含む明瞭な砂、粘土の落ち込みからなる自然河道NR01を検出している。従ってこれらの自然河道以前も不安定な氾濫原や河道の重複する低湿地であったことが知られる。

2. 検出遺構

落ち込みSO01

北調査区西端で検出した浅い溝状の落ち込みである。後述する溝SD01の上部の窪みに該当し、第III層上面を検出面とする。東西幅約3m弱で深さ約0.4m程度を検出し、埋土からは須恵器・土師器片や埴輪片、土馬等の古墳時代後期～奈良・平安時代の土器片が出土している。

溝SD01

北調査区西端で検出した北西～南東方向の溝である。最大幅2.6m、深さ0.4mを測り、埋土に微砂・シルトや粘質土の互層堆積が見られることにより流路として機能していたことが考えられる。埋土中には弥生土器片が主体的に含まれるが時期の下限は弥生中期後半末頃である。

土坑SK01

北調査区東側のやや中央寄りに検出した浅い土坑である。最大幅約1mで深さは最深部で約0.3mである。第IV層の無遺物の砂層上面で検出している。埋土は灰色シルト質粘土・微砂であり、わずかに微細な土器片を含む。出土土器から弥生中期前半～中葉頃の帰属時期が考えられる。

自然河道NR01

北調査区東端に近く検出した自然河道である。調査では第IV層上面より検出しており、下半埋土のみ掘り下げたが底面までの完掘には至っていない。堆積土層の観察からは上下2条の河道の重複が確認されるが、上部埋土からは弥生中期前半の土器片、下部埋土から弥生前期の土器片がそれぞれ主体となつて出土している。最大幅約5mを測り、深さは掘削途中の最深部で約0.8mまでの確認を進めた。

自然河道NR02（第V～VI層）

北調査区の西端から約2/3を占める自然河道である。流路方向は北西～南東方向であり、埋土は基本層序の第V～VI層の粘質土・粘土等を基調とする。調査区中央付近での埋土の完掘には至っていないが東側肩部までを土層断面より確認している。埋土中には弥生前・中期の土器や石器類、自然木等が含まれ、弥生中期初頭～前半の土器が混在する第V・VI層以下の第VII層では弥生前期の土器のみを含むことを確認している。

第3節 出土遺物

今回の吉田遺跡における発掘調査では、前年度実施の第1次調査と同様に弥生前・中期～古墳後期の土器類を主体とした各種遺物の出土が確認されている。遺物総量ではコンテナ約20箱分におよぶが、その大半は北調査区の自然河道より出土した弥生前期の土器類が大半を占めている。以下、図示した遺物をもとに概観する。なお、土器類の色調、胎土、焼成等の観察と出土地点についてのみ記した観察表を作成したが、法量や調整手法等の項目を省略した簡略なものとなっている点を予め断っておきたい。

1. 土器類

東調査区自然河道群出土土器（図5-1～12・図6-13～18）

1は縄文晩期末の突帯文土器の深鉢口縁部小片である。今回出土した土器類のうちでは最も形態的に古い様相を示すものである。

2～6はいずれも弥生前期の壺である。2・3は多条沈線、4には貼り付け突帯がそれぞれ巡らされている。5・6は中型品の壺の後円部であり、6には口縁端部に刻み目が施されている。

7・8はともに同形態の壺であるが、7は1条の沈線、8には3条を単位とする多条沈線が2段に施文されており、ともに口縁端部には刻み目が施される。

9は小型の蓋形土器である。おそらく壺に付随する蓋と思われる。

10は把手付き鉢である。先端を欠損するもの小さく扁平な把手が口縁部の直下に取り付けられるものである。

11・12は鉢であるが、前述の壺に比べて屈曲した口縁の発達が顕著でありやや後出する要素を示す。

13・14の底部片はそれぞれ壺と壺の底部と考えられる。13の底部外面には丁寧なミガキ調整が看取され、概ね弥生中期前半のものと思われる。

15は外面に櫛描直線と簾状文の施文、縦位のミガキが見られる無頸壺（鉢）であり、弥生中期後半の土器である。

16・17は外面叩き調整の壺である。いずれも弥生後期後半以降のものであるが、17の内面にはヘラ削り調整が認められるためやや後出する庄内式併行期のものと考えられる。

18は円筒埴輪の小片である。外面には一次調整のタテハケの後に二次調整のヨコハケが施され、内面にはナナメハケのみが見られる。

これらの土器類では古相の一群が縄文晩期末～弥生前期後半および弥生中期前葉までの時期幅に、また新相が弥生中期後半～後期末と認められ、それぞれの帰属時期を内包する東調査区自然河道群の時期幅が示されるものと考えられる。

北調査区落ち込みS001出土土器（図6-19～22）

19は須恵器器台の小片である。外面に櫛描波状文による施文が見られ、長方形透かし孔の一部が残る。

20・21は円筒埴輪である。20は外面をタテ方向の板ナデ、内面をナナメ指頭ナデする極めて省略化した器面調整による円筒埴輪である。21は基底部付近の小片であるが内外面の調整は摩滅のため看取できない。いずれの埴輪も概ね古墳後期の帰属が考えられる。

22は土馬の脚部片である。長さ3cm程度の脚部のみ残るものである。外面にはヘラナデによる面取り調整が認められる。

北調査区溝SD01出土土器（図6-23～26）

23～26はいずれも弥生中期前半の土器である。

23は広口壺の口縁部小片である。口縁端部の下方に櫛描文施文原体による刻みが施され、口縁の外側には沈線のみが残る。おそらくこれより下位では櫛描直線文による多条の施文が考えられる。

24は鉢である。内外面ともにヨコ方向の丁寧なミガキ調整が見られる精製品である。

25・26の底部はそれぞれ壺と壺と考えられるが、粗いハケ調整の26は大型壺の底部と思われる。

北調査区土坑SK01出土土器（図6-27）

27は外面にヨコ方向のハケ、内面を板ナデするもので概ね弥生中期前半の鉢である。

北調査区自然河道NR02出土土器（図7-28~51・図8-52~66・図9-67~71）

自然河道NR02出土土器は今回の調査で最も数量的に豊富な内容をもつ。ここでは小片でも外面施文の明らかなものの多数を拓影と断面により図示することにした。従って、個々の土器についての記述よりも相対的な土器組成のなかで特筆すべきものについてのみ詳述することにしたい。

28~38は自然河道NR02出土土器でも新相を示す一群であり弥生中期前半から後半・末までのものを含む。そのうちの28・29の凹線文の見られる2点の土器については上部堆積土あるいは上面からの遺構埋土よりの混入とも考えられるものであるが、河道の最終埋没時期の一端を窺い知ることのできる資料となる。

30~71の土器のうち、弥生前期の壺では頸部および胴部上端にヘラ描き沈線の施文されるものが多数認められ、少条のものから多条のものまで様々な種類が見られる。また、形態的にも古式な様相を示すものとして49・61のような多条沈線帯の上下端を削り出して突出させた後にミガキ調整をえたものや、42のように木葉文のモチーフを描くものも見られる。他にも広口の口縁端に沈線のみを巡らす59や沈線の上下に刻み目を加える39~41のようなものまで多様である。なお、短く外反する口縁部と2条あるいは3条の沈線を巡らして形態的にも古相を呈するものに64の壺が挙げられる。壺では他に沈線の代わりに竹管文を巡らす44があり、特異な例となる。壺では弥生前期に通有な形態でI.II縁端部の刻み目と頸部付近の少条沈線の48・50・51のようなものが主体となる。その他の器種では65の鉢や68の壺蓋、71の把手付鉢等が出土しているが、他にも66のような器種と形態が不明な多角形の平面形を成すものもある。

弥生前期末～中期初頭では多条沈線から初期の櫛描直線文への過渡期に該当する67・70の壺があり、次の段階に主流となる30~35・38の直線文単独あるいは直線文+波状文による施文のものまでが認められる。36の壺はおそらく水差し形土器であり、初期の流水平施文土器となるものである。

外来系土器では37の条痕文系土器の内傾口縁の鉢が見られ、伊勢湾沿岸地域よりの搬入品として認められる。

北調査区自然河道NR01出土土器（図9-72~78）

自然河道NR01では、自然河道NR02と同様に弥生前期の土器が多く出土しているが弥生前期末～中期初頭の土器が主体を成している。

壺では72のようにヘラ描き沈線をもたず無文でハケあるいはナデ調整のみのものと76のように多条沈線のものが多いが、74・75の少条のものも少なからず含まれている。74は沈線帯の下端を削り出したミガキ調整するもので形態的には古相を示し、75では沈線間に縱位の刺突による施文が加えられている。

壺では77のような弥生前期に通有なものが主体となるが、頸部直下の沈線のないものが目立つ。

他に外来系上器では条痕文系の伊勢湾沿岸～尾張地域から搬入された78の水神平式の壺が見られる。

北調査区東端池岸埋土出土埴輪（図9-79）

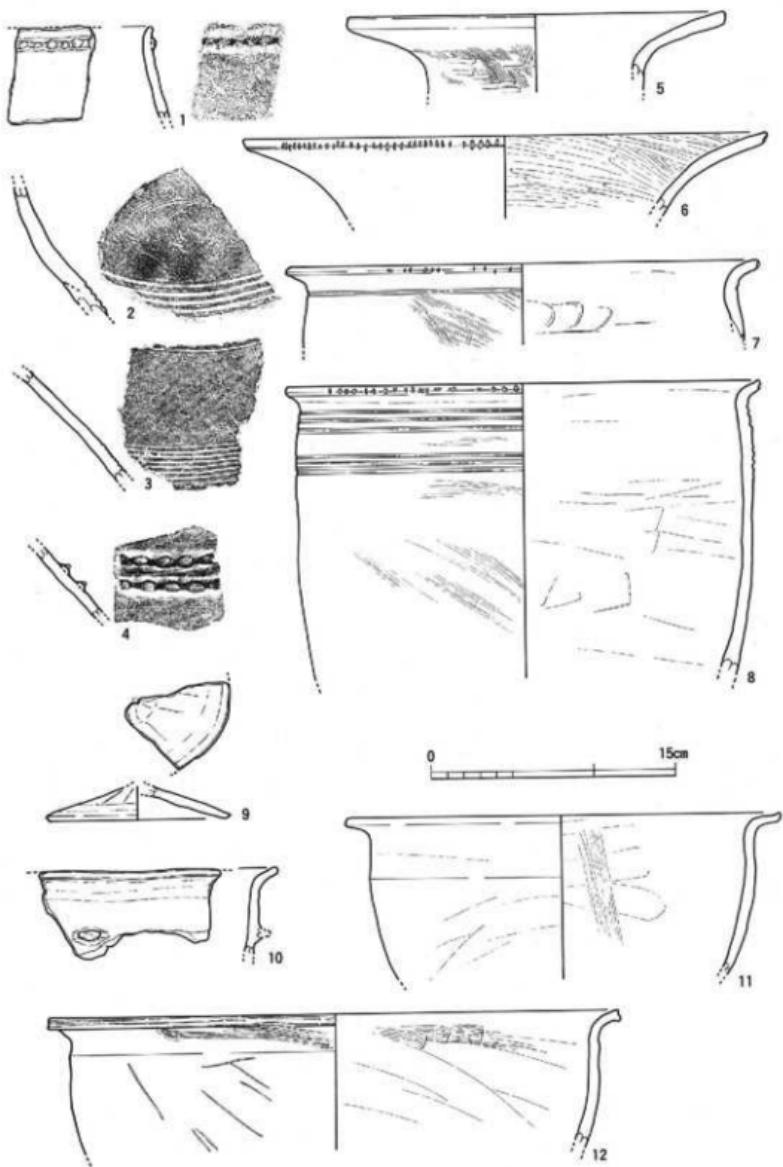


図5 出土遺物実測図1 (S=1/3)

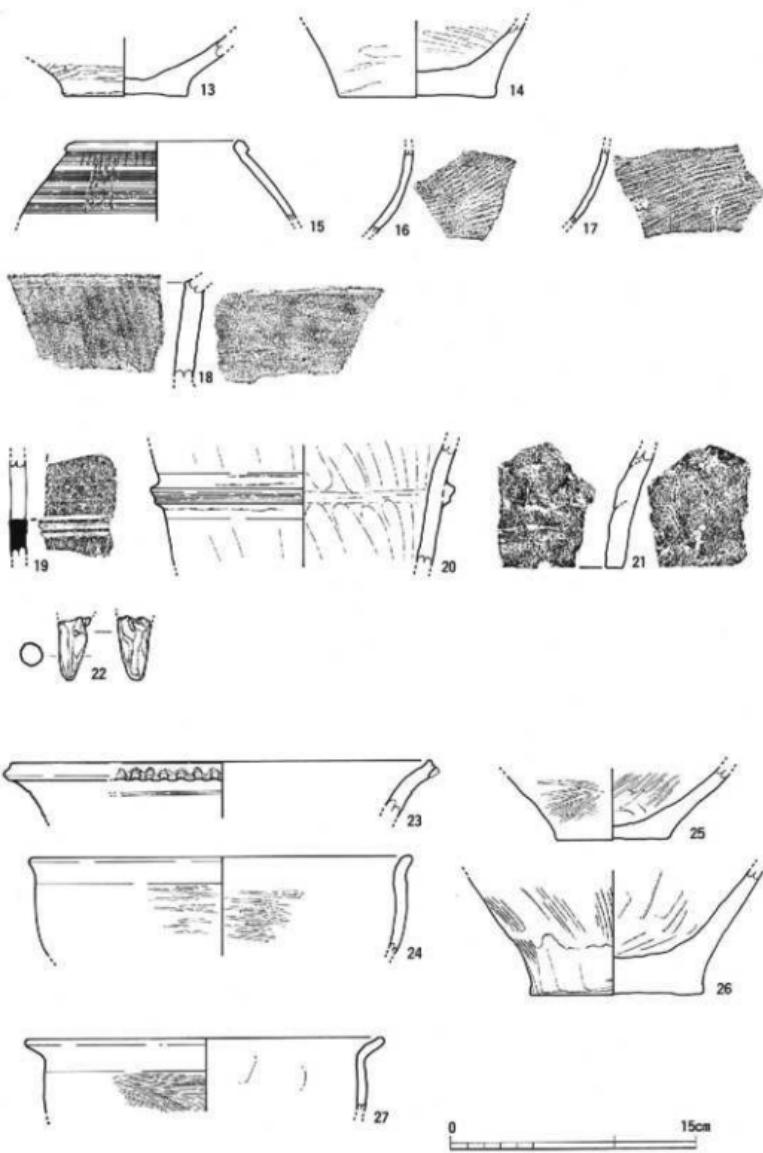


図6 出土遺物実測図2 (S=1/3)

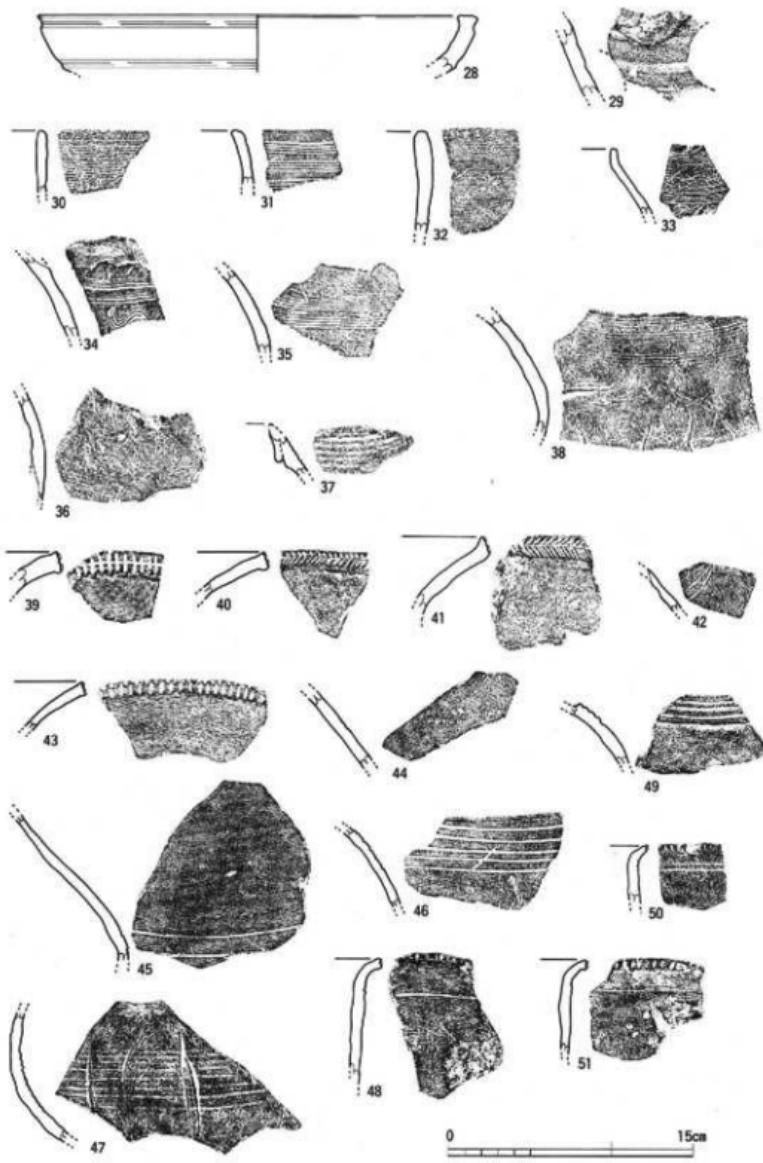


図7 出土遺物実測図3 (S=1/3)

79は北調査区東端の池岸埋土出土の形象埴輪である。円筒部に付加された鰐部の一部までが残るものであるが、鰐部径は小さく鰐部の仕上げもナデ調整のみである。形態的に見て古墳後期の盾形埴輪の一部分と思われ、時期的にも石見型盾形埴輪と考えられるものである。

2. 石器類

打製石器類（図10-80・81）

打製石器類はいずれもサヌカイト製品である。

80は石槍の先端のみ残る折損品である。先端付近に礫面が僅かに残るために製作途中の欠損によるものとも考えられる。

81は完存する石小刀である。周縁および基部付近には押圧技法による剥離痕跡が見られるが、刃部周縁から切先付近にかけては交互の打ち欠きによる鋸齒状の加工が施されている。

磨製石器類（図10-82~86）

82は短冊形の形態をとる石包丁である。一部に整形時の剥離面を残すが全体に丁寧な研磨が施されており僅かに円孔の周縁が残る。乳白色を呈した耳成山産流紋岩を素材とするものである。北調査区自然河道NR02（第VI層）出土である。

83は半月形の通有な形態の石包丁である。緑色の結晶片岩を素材とするものであるが、両面より穿孔される円孔が未完通なまま残るために完成直前での形態を示す未成品と考えられる。北調査区自然河道NR01より出土している。

84は石包丁の形態を整えた段階で器面の研磨中にかかる工程での折損品である。耳成山産流紋岩製。北調査区自然河道NR01（第V層）より出土している。85は石包丁製作にかかる耳成山産流紋岩製の素材剥片である。石理面に沿って板状に剥離したもので周囲には原石の礫面が残る。北調査区自然河道NR01（第V層）出土である。

86は結晶片岩製の剥片である。おそらく原石より石包丁の素材剥片を採取する際に生じたものと思われる。東溝査区南半自然河道群より出土している。

87は結晶片岩製の剥片である。片面にのみ研磨痕が残るために石包丁製作途中での剥落が考えられるものである。北調査区自然河道NR01（第V層）より出土している。

88は器面の中央付近と周縁に著しく擦痕が残り多面を成すチャート製の擦り石である。石包丁等の器面研磨に使用されたことが推測される。北調査区自然河道NR01（第V層）から出土している。

これらの磨製石器類からは石包丁の製作にかかる原石からの素材剥片の採取、整形と研磨までの各工程が当遺跡において一貫しておこなわれていたことが窺われ、耳成山産流紋岩と結晶片岩の2種類の原材料から出土土器類の時期幅と同じく弥生前・中期の間に連続と続く石器製作の存在を知ることができるものである。

3. その他の遺物

銭貨類（図11-89・90）

89の小判は天保通宝である。長辺4.8cm、短辺3.1cmで厚さは縁周りで約2.5mm、薄い部分で約1.5mmをそれぞれ測る。表面に「天保通宝」の文字が縦位に記され、裏面には「当百」とその価値を示す文字と花押が付されている。天保年間に初鑄される小判として知られるが、今回出土したものは幕末より明治初頭にかけて流通していた新しいタイプのものである。

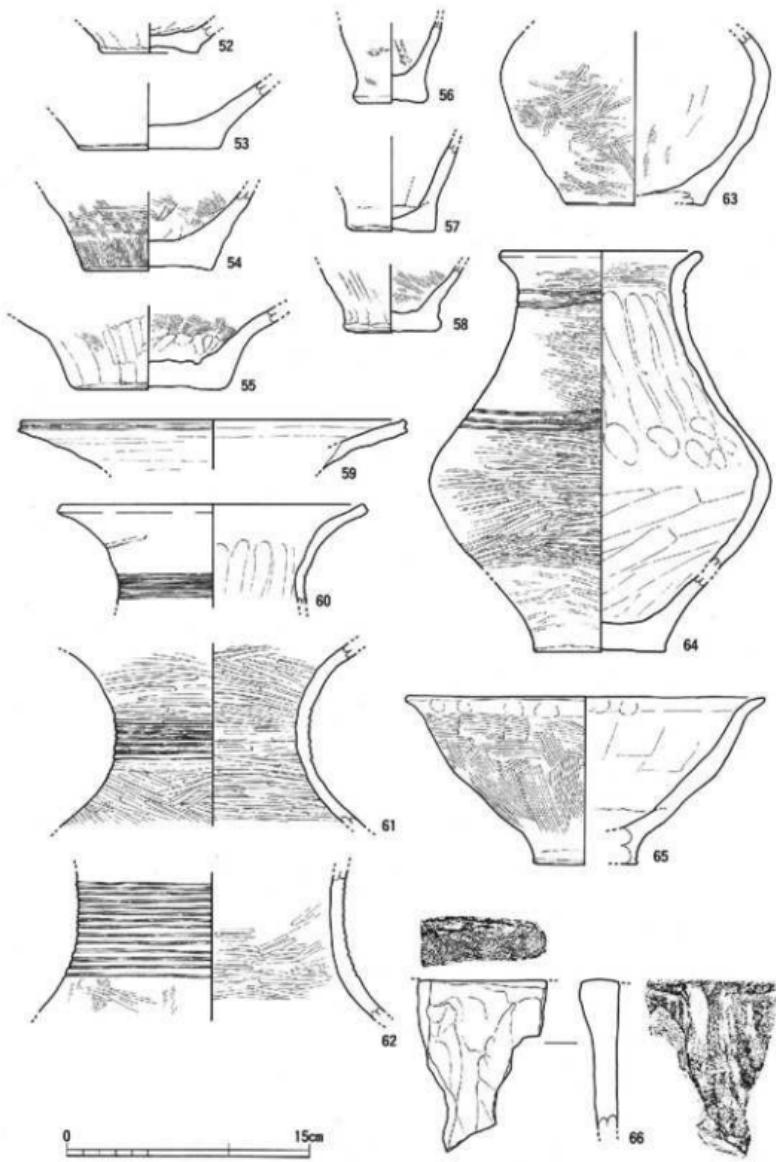


図8 出土遺物実測図4 (S=1/3)

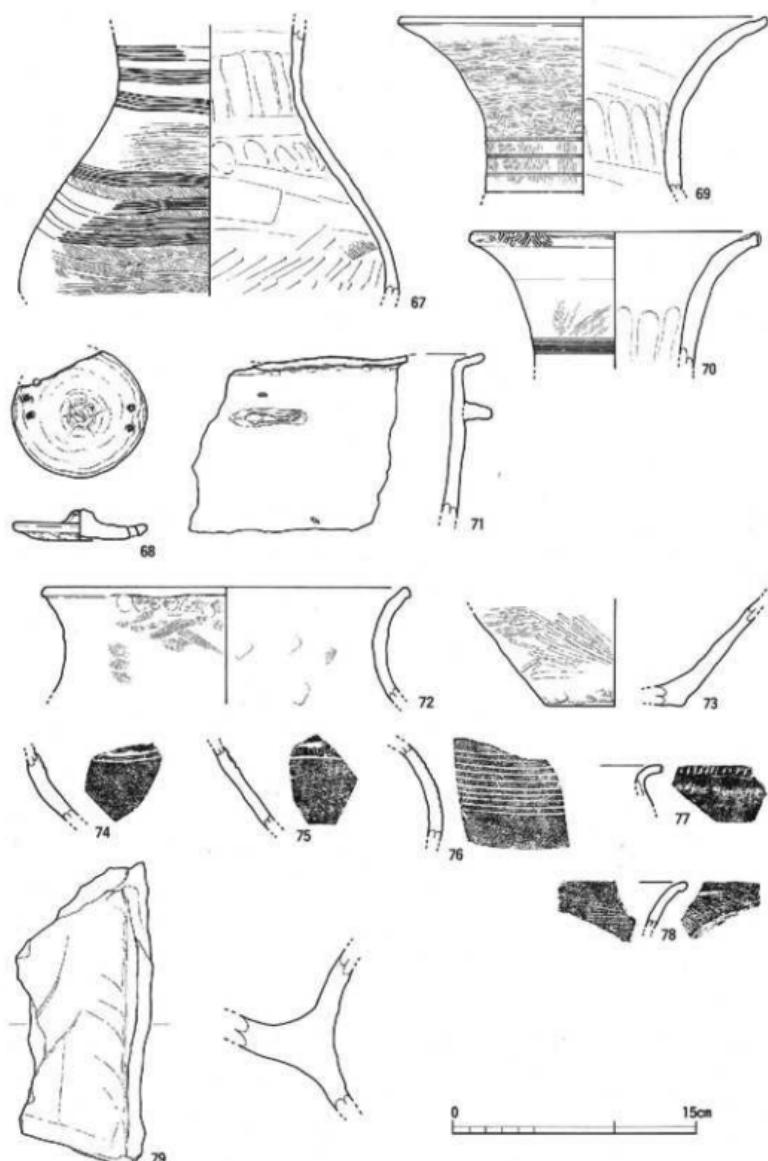


図9 出土遺物実測図 5 (S=1/3)

表 出土土器類觀察表

| 番号 | 部類 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点・備考 |
|----|--------|--------------|-----|------|----------------------------|
| 1 | 深鉢 | 2.5Y7/1灰白 | 密 | 良好 | 東調査区北半自然河道群 楠文晚期の突帯文土器 |
| 2 | 盃 | 10YR7/4にぶい黄橙 | やや密 | やや良好 | 東調査区南半自然河道群 |
| 3 | 盃 | 10YR7/2にぶい黄橙 | やや密 | やや良好 | 東調査区南半自然河道群 |
| 4 | 盃 | 10YR5/1褐色 | やや密 | やや良好 | 東調査区南半自然河道群 |
| 5 | 盃 | 10YR7/2にぶい黄橙 | 密 | 良好 | 東調査区南半自然河道群 |
| 6 | 盃 | 10YR7/4にぶい黄橙 | やや密 | やや良好 | 東調査区南半自然河道群 |
| 7 | 甕 | 10YR7/4にぶい黄橙 | 密 | 良好 | 東調査区南半自然河道群 |
| 8 | 甕 | 7.5YR7/6灰 | やや密 | やや良好 | 東調査区南半自然河道群 |
| 9 | 盃蓋 | 2.5Y8/3淡黄 | 密 | 良好 | 東調査区南半自然河道群 |
| 10 | 把手付き鉢 | 5YR8/3淡黄 | やや粗 | やや良好 | 東調査区南半自然河道群 |
| 11 | 鉢 | 10YR7/3にぶい黄橙 | やや粗 | やや良好 | 東調査区南半自然河道群 約1/5残存 |
| 12 | 鉢 | 10YR8/2浅黄橙 | やや粗 | 良好 | 東調査区南半自然河道群 約1/6残存 |
| 13 | 底部 | 5YR6/4にぶい黄 | 密 | 良好 | 東調査区南半自然河道群 |
| 14 | 底部 | 5YR7/4にぶい黄橙 | やや密 | 良好 | 東調査区南半自然河道群 |
| 15 | 甕無蓋 | 10YR7/2にぶい黄橙 | 密 | 良好 | 東調査区南半自然河道群 |
| 16 | 甕 | 5YR6/4にぶい黄橙 | 密 | 良好 | 東調査区南半自然河道群 |
| 17 | 甕 | 2.5Y6/2灰黄 | 密 | 良好 | 東調査区南半自然河道群 |
| 18 | 円筒埴輪 | 10YR5/3にぶい黄褐 | 良好 | 良好 | 北調査区西端SD01 |
| 19 | 須恵器・器台 | 7.5Y7/1灰白 | やや粗 | やや歎 | 北調査区西端SD01 基底付近にヨコケズリ |
| 20 | 円筒埴輪 | 10YR5/3にぶい黄褐 | 粗 | やや歎 | 北調査区西端SD01 |
| 21 | 円筒埴輪 | 2.5YR4/6赤褐 | 密 | 良好 | 北調査区西端SD01 約1/6残存 |
| 22 | 土馬 | 10YR7/3にぶい黄橙 | やや密 | やや良好 | 北調査区西端SD01 約1/6残存 |
| 23 | 甕 | 7.5YR7/4にぶい黄 | 密 | 良好 | 北調査区西端SD01 |
| 24 | 鉢 | 5Y4/1灰 | やや密 | やや良好 | 北調査区西端SD01 |
| 25 | 底部 | 10YR6/2灰黄褐 | やや密 | やや良好 | 北調査区西端SD01 |
| 26 | 底部 | 10YR4/2灰黄褐 | やや密 | やや良好 | 北調査区西端SD01 |
| 27 | 鉢 | 2.5YR5/8明赤褐 | やや粗 | やや良好 | 北調査区西端SD01 |
| 28 | 甕 | 7.5YR7/6縦 | やや密 | やや良好 | 北調査区西半第IV層 約1/4残存 |
| 29 | 器台 | 10YR8/4浅黄橙 | やや密 | やや良好 | 北調査区西半第IV層 |
| 30 | 甕 | 10YR6/4にぶい黄橙 | やや粗 | やや歎 | 北調査区西半第V-VI層 櫛描直線文 |
| 31 | 甕 | 10YR7/3にぶい黄橙 | 密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛描直線文 |
| 32 | 甕 | 2.5YR6/8明赤褐 | やや粗 | やや歎 | 北調査区西半第V-VI層 櫛描直線文・波状文 |
| 33 | 甕無蓋 | 7.5YR4/2灰黄 | やや密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛描直線文・波状文 |
| 34 | 甕 | 7.5YR5/3にぶい褐 | 密 | 歎 | 北調査区西半第V-VI層 櫛描直線文 |
| 35 | 甕 | 10YR3/2黒褐 | 密 | 歎 | 北調査区西半第V-VI層 櫛描流水文 |
| 36 | 甕 | 7.5YR5/2灰黄 | やや粗 | やや歎 | 北調査区西半第V-VI層 貝殻柔条文 |
| 37 | 甕 | 5YR7/4にぶい橙 | やや粗 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛描直線文 |
| 38 | 甕 | 5YR7/8橙 | 密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛描直線文 |
| 39 | 甕 | 7.5YR4/1褐 | やや密 | やや歎 | 北調査区西半第V-VI層 櫛描・刻み目 |
| 40 | 甕 | 10YR6/3にぶい黄橙 | 密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛描・刻み目 |
| 41 | 甕 | 5YR5/4にぶい赤褐 | やや粗 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛描・刻み目 |
| 42 | 甕 | 2.5YR4/1赤褐 | 密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 ヘラ描栗文 |
| 43 | 甕 | 10YR7/4にぶい黄橙 | 密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛描・刻み目 |
| 44 | 甕 | 5YR6/8褐 | 粗 | やや歎 | 北調査区西半第V-VI層 竹管文 |
| 45 | 甕 | 2.5YR4/6赤褐 | 粗 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 46 | 甕 | 10YR6/4にぶい黄橙 | やや密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 47 | 甕 | 7.5YR7/6縦 | やや密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 48 | 甕 | 7.5YR5/6明褐 | やや粗 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 49 | 甕 | 7.5YR5/3にぶい褐 | 粗 | 歎 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 50 | 甕 | 2.5YR5/8明赤褐 | 粗 | やや歎 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 51 | 甕 | 5YR6/6褐 | やや密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 52 | 底部 | 10YR8/2灰白 | やや密 | やや歎 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 53 | 底部 | 10YR7/1灰白 | やや密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 54 | 底部 | 10YR6/3にぶい黄橙 | 粗 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 55 | 底部 | 2.5Y6/2灰黄 | やや粗 | やや歎 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 56 | 底部 | 5YR6/8縦 | 密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 57 | 底部 | 2.5Y8/3淡黄 | 粗 | 歎 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 58 | 底部 | 10YR6/1褐色 | 密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 59 | 甕 | 7.5YR7/3にぶい橙 | 粗 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 60 | 甕 | 10YR5/2灰黄 | 密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 61 | 甕 | 2.5YR5/8明赤褐 | やや粗 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 62 | 甕 | 5YR5/8明赤褐 | やや密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 63 | 甕 | 10YR6/3にぶい黄橙 | 密 | やや歎 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 64 | 甕 | 5YR5/8明赤褐 | 粗 | やや歎 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 65 | 鉢 | 2.5Y8/3淡黄 | やや密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛線文 |
| 66 | 不明 | 10YR8/5浅黄橙 | 密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 ヘラ描き沈線 約1/4残存 |
| 67 | 盃 | 7.5YR8/6浅黄橙 | やや粗 | 歎 | 北調査区西半第V-VI層 ほば光形 |
| 68 | 盃蓋 | 7.5YR7/6縦 | 粗 | 歎 | 北調査区西半第V-VI層 沈線 約1/4残存 |
| 69 | 甕 | 10YR7/4にぶい黄橙 | 密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 櫛描文 約1/4残存 |
| 70 | 甕 | 7.5YR4/3褐 | やや密 | 良好 | 北調査区西半第V-VI層 沈線 |
| 71 | 把手付き鉢 | 10YR7/4にぶい黄橙 | 密 | 良好 | 北調査区東NR01西 約1/8残存 |
| 72 | 甕 | 5YR6/8縦 | やや粗 | 歎 | 北調査区東NR01西 約1/4残存 |
| 73 | 底部 | 5YR5/6明赤褐 | やや密 | 良好 | 北調査区東NR01西 沈線 |
| 74 | 甕 | 10YR4/2灰黄褐 | やや粗 | 良好 | 北調査区東NR01西 沈線・刻み日 |
| 75 | 甕 | 5YR5/6明赤褐 | 密 | 良好 | 北調査区東NR01西 沈線 |
| 76 | 甕 | 5YR5/6明赤褐 | やや粗 | 良好 | 北調査区東NR01西 刻み日 |
| 77 | 甕 | 2.5YR5/8明赤褐 | やや密 | 良好 | 北調査区東NR01西 伊勢湾沿岸産 |
| 78 | 甕 | 7.5YR4/3褐 | 密 | 良好 | 北調査区東NR01西 石見形か? |
| 79 | 盾形埴輪 | 10YR7/2にぶい黄橙 | 密 | 良好 | |

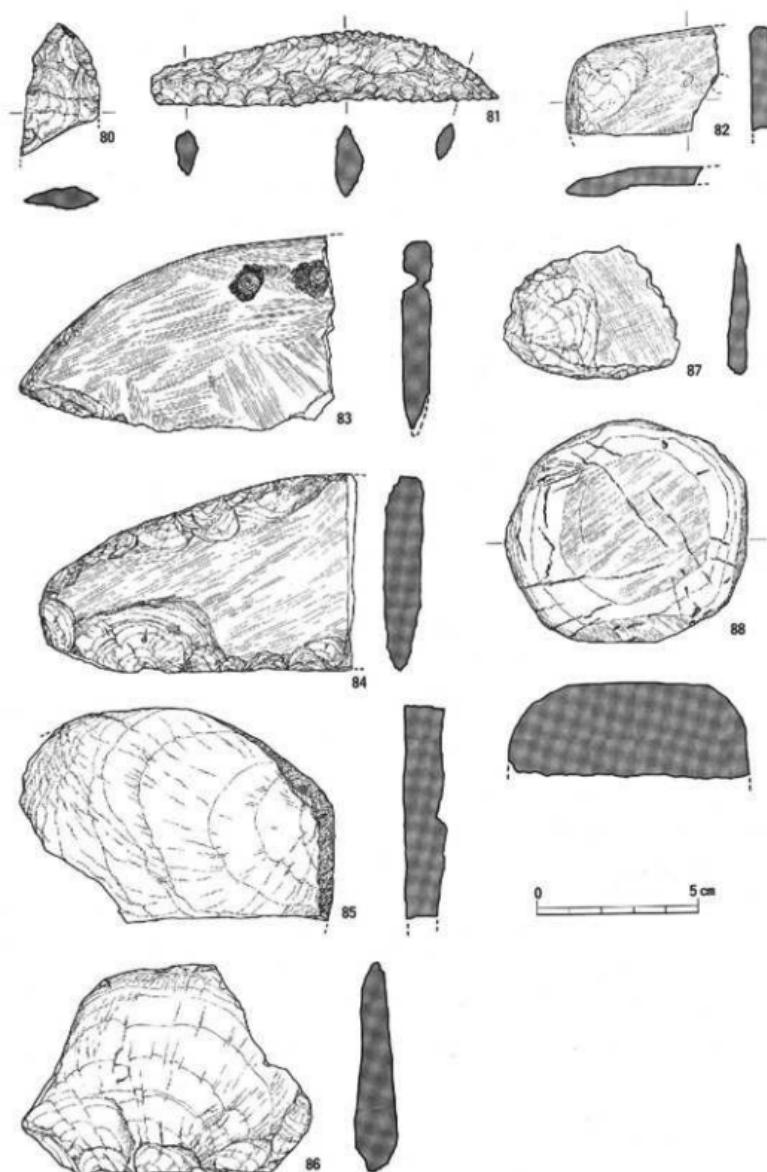


図10 出土遺物実測図 6 (S=2/3)

90の寛永通宝は径2.1cmを測る小さなものであるが、「寛」の文字の左側に小孔が穿たれることより後世に根付けとして再利用されていたことが窺われる。両者の銭貨ともに東調査区の池岸埋土より出土している。

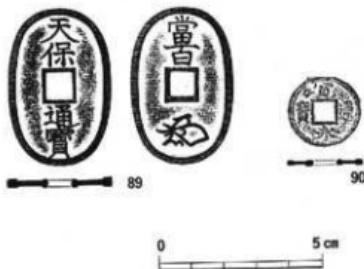


図11 出土遺物実測図7
(S=2/3)



写真11 小判（寛保通宝）出土状況

第Ⅳ章 まとめ

今回の吉田遺跡における調査では、前年度に奈良県立橿原考古学研究所によって実施された第1次調査の成果に加えて新たな知見を得ることとなった。以下、各項目ごとに列記し調査のまとめとしておきたい。

遺跡の時期とその内容

調査の結果、吉田遺跡における遺跡の主体的な時間的位置付けについての多くの材料を得ることができた。まず、第一に多くの弥生前期土器資料の出土が挙げられ、この中にはわずかに繩文晩期末の突帯文土器や削り出し突帯の伝統を引く弥生前期前半の土器が含まれていたことから近隣あるいはこの周辺地域に当該時期に遡る集落の経営が想定されることとなった。従って、これらの調査成果が奈良盆地における初現期の弥生時代集落遺跡の立地と弥生土器の受容、展開を考えるうえでの貴重な事例を提供するものと成り得たのである。遺跡の存続時期については弥生前期以降も存続し弥生中・後期へと連続的な集落の存在が考えられる。なお、これまでの吉田池の調査では弥生中期前半～後半の明瞭な遺構の存在が確認されてはいるが、弥生前期の人为的な遺構の所在は未確認である。弥生前期以降の集落立地としては自然河道の上流側である吉田池の北あるいは北東方向に展開する微高地上から河岸近辺と推定される。また、弥生後期でも後半～末・古墳前期初頭の土器の出土が認められるのみであり、現時点での集落動向の想定では一定領域内での小規模集落（生活領域）の移動が著しかったものと理解しておきたい。それにはおそらく自然環境の変化による微地形の変動が大きな要因となったことが推測されよう。

次に、周辺遺跡との関連では第1次調査区北端でヒジリ古墳前方部の一辺を区画する周濠相当の溝SD01が確認されたことに続き、今回の第2次北調査区西端付近でも須恵器や埴輪の出土が確認されている。また、同時期の遺物の出土は東調査区でも見られたためヒジリ古墳周辺にも小規模な古墳の所在を考える手掛かりとなった。その場合に古墳築造の基盤集落の領域は吉田池南側の現在の村落域あるいは弥生前期以降の集落立地を満たす北西方向の微高地上と考えておきたい。

調査成果から指摘される点として現在ヒジリ古墳が所在する吉田池北西の微高地と南側の吉田町村落の位置する安定した基盤層のある微高地との間には北西～南東にのびる標高46m前後の低地帯の存在が確認されたことを挙げておきたい。すなわち、こうした地理的要件から近世におけるため池開削の条件として旧来の自然河道等の位置する低地、低湿地を選択しておこなわれたことが明確となった。このことから近世のため池開削や農業用水路設営等の灌漑事業が周囲の地理的用件を考慮しつつ極めて計画的に挙行されたことが窺われる。

吉田池周辺の景観復元

前項においても地理的要因による土地利用の変遷について若干ながら触れておいたが、ここではこれまでの調査成果を踏まえたうえで吉田池周辺における弥生時代前・中期の旧河道の在り方をもとにした景観復元の想定を考えておくことにしたい（図12）。また、併せて第2次調査における検出遺構群の変遷についても触れるものとしたい。

弥生前期以前よりの流路、低地帯は現在の吉田池全体が取まるようななかたちでの広がりを示し、当該時期の安定した基盤土壤は第2次北調査区東端から同東調査区北部付近までの吉田池北東方と第1次調査区北部付近と南端のみでしか確認されていない。遺跡の出現以前からの微高地の存在は先述の各地点つまり吉田池の北東および北西、南西の辺りに限定され、この各微高地間に繩文晩期末～弥生前期前半

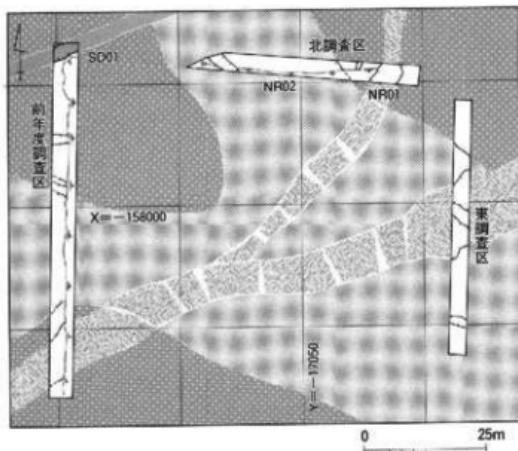


図12 吉田池周辺における旧河道想定復元図 (S=1/1000)

頃まで第2次北調査区自然河道NR02および東調査区の大半、それに第1次調査区中央付近の河道が流れていることが知られる。これらの低地帯中央に本流として西流する河道群の支流あるいは時期差をもって重複する第2次北調査区自然河道NR01や東調査区の上位流路群、第1次調査区南端流路が自然環境の変化と推移による流路方向の変更のために存在し、弥生中期前半～後半にかけて部分的に埋没して次第に生活領域としての変化を遂げるようである。第1次調査区中央よりやや北側ではそうした小集落域の南限区画の溝も検出されている。第2次調査地では同等な遺構は未確認であったが、北調査区の土坑SK01や溝SD01および第III・IV層遺物包含層の形成から察することができる。前述の低地帯は弥生時代以降も低地のままであったらしく、中世以降の耕作の影響を割り引いても遺構の存在は認められない。おそらく近世の吉田池開削の頃まで水捌けの良くない低地であったため池がそこに作られたのであるうし、吉田池北辺の東西と南辺～南東の吉田町村落付近は累々と自然堤防として移動、変化を重ねた微高地であったものと考えられる。

以上のように断片的な事柄からではあるが吉田池周辺の変遷を考えておきたい。

結語

今回の調査を含め吉田遺跡における考古学的な調査成果として指摘される事柄を幾つか示しておいた。周辺開発の乏しい田園地帯である当遺跡周辺であるが、吉田池周辺に拡がる弥生集落の想定領域を示したように今後も周辺における農地改良あるいは水路工事等に伴う突發的な開発に対して留意する必要があろう。

なお、奈良県立橿原考古学研究所による吉田池西岸の第1次調査の報告に先行して本書をまとめるここととなつたが、不明瞭な点や再考すべき問題点も含めて再論する機会を期待したい。

平成14年3月31日◎

吉田遺跡

-国営総合農地防災事業・吉田池改修工事に伴う発掘調査報告-

発行 天理市教育委員会
編集 天理市川原城町605番地

印刷 天理時報社
天理市稻葉町80番地